

【暗証聖句】「人の子が来るのは、ノアの時と同じだからである。」マタイによる福音書 24 章 37 節

【日・洪水の備え】

創世記 6:13～7:10 にかけて、有名なノアの箱舟の物語があります。箱舟というヘブライ語「テヴァー」は、モーセがナイル川で隠された「かご」と同じ言葉が使われているのは深いところです。また十戒の板が入れられた「契約の箱」に類似性を見る人もいます。どれも、神様が人々の命を守るために用いられた物であるという共通点があります。ノアはこの巨大な箱舟を造るようと主から言われ、「すべて命じられたとおりに果たしました」(創世記 6:22)。この「果たした」という言葉「アーサー」は、「造る」という意味の言葉で、箱舟を「造りなさい」と主が言われた同じ言葉「アーサー」に応答しています。6:14～16 にかけて、この言葉が 5 回も繰り返されており、神様が言われた通りに行くことがいかに大切なかが教えられています。ちなみに、契約の箱を造るときにも、同じ言葉が使われています。ノアの箱舟の長さは 137m、幅が 23m、高さが 14m の 3 階建てで、内部に小部屋を多く設けました。これは今の船に換算すれば 5 万トン級のタンカーに相当し、長さ・幅・高さの比は今日の船舶工学を駆使した近代船舶の比率とまったく同率です。このような巨大で頑丈な舟を造ることは、人知では不可能なことでした。人類のあけぼの上 P90 に、次のように書かれてあります。「神は、箱舟の正確な大きさと、その建造上の指示を明確にノアにお与えになった。人知ではこうした頑丈で耐久性のある建造物を考案することは不可能であった、神が設計家でノアが建築家であった」。箱舟が完成するまで 120 年もかかります。ノアとその家族の忍耐や努力は、神様への絶対的な信仰から生まれるものでした。ノアは単純に神がするように命じられたことに従う信仰を持っていたために救われたのです。服従の中に示される信仰こそ救いの鍵であることの良い実例です。

【月・洪水の出来事】

天地創造の場面で繰り返し使われている「造る・アーサー」という言葉が、ノアの箱舟の場面でも繰り返し使われているという共通点があることを、日曜日のところで学びましたが、それ以外にもいくつもの共通点を見出すことができます。たとえば、「7」「男と女」「種類に従って」「獣」「鳥」「地を這うもの」「命の息」などです。神様が創造されたものを、そのまま箱舟の中に入れて、新たな出発をさせようとしておられるのがわかります。その際に神様が用いられたのが水でありました。この世界はもともと水に覆われていました。その水を、神様は創造の 2 日目に「大空の下と大空の上に水を分けさせられ」(創世記 1:7)、さらに 3 日目に神様は、「天の下の水は一つ所に集まれ。乾いた所が現れよ」(創世記 1:9) と、下の水を一か所に集めて海とし、陸地を設けられました。つまり、最初の世界には空を覆う水の層が存在していたということです。この水の層が決壊し、降ってきたのがノアの大洪水なのです。その結果、ある意味この世界は、天地創造の 1 日目、振り出しに戻ってしまったのです。神様は新たな創造のために先のを壊されたのです。このことは、黙示録 21 章に描かれている新しい天と地が創造されるときにも起こります。黙示録 21 章 1 節「わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は去って行き、もはや海もなくなった」。だから、主のご再臨がノアの大洪水のときにたとえられているのです。イエス様はこう言われました。「人の子が来るのは、ノアの時と同じだからである」(マタイ 24:37)。ところで、ノアの洪水によって水の層が決壊し、地上を再び覆ってしまったわけですが、その水はいまどこに消えてしまったのでしょうか。蒸発したとすれば、それはまた地上に雨となって降ってくるわけですから総量はかわらず、地上は水に覆われたままとなります。では、地面の下に吸収されていたのでしょうか。実は地球の内部のマントルには、水を吸収する鉱物が存在しており、海の 5 倍もの水があるのではないかとされています。おそらく、そこにもともと空の上を覆っていた水があるのでしょうか。

【火・洪水の終わり】

創世記 8 章 1 節「神は、ノアと彼と共に箱舟にいたすべての獣とすべての家畜を御心に留め、地の上に風を吹かせられたので、水が減り始めた」

雨は 40 日 40 夜降り続け、その後 150 日間もの間、海の上を漂流します。この間のことを、人類のあけぼの上 P105 で次のように描写されています。

「箱舟は五か月もの間風や波にもまれてただよったので、箱舟のなかの家族は死んでしまうのかと思ったことがたびたびあった。それは、苦しい試練であった。しかし、ノアは神のみ手がかじをとっていることを確信していたので、彼の信仰はゆるがなかった」。

箱舟には動力がありませんでしたから、自力で乾いた土地を探して進んでいくことはできませんでした。150 日もの間、洪水から守ってくださった神様を信じていくしかありませんでした。しかし、神様がかじをとってくださっているのだというノアの信仰はゆるぐことはありませんでした。そして、ついに神様が「御心に留め」てくださったので、水が減り始めます。この「御心に留め」という言葉「ザガール」は、神様は忘れておられないということを意味しています。ところで、水が徐々に減っていく中で、ノアは地上の状態を確かめるためにカラスやハトを放します。そして、ついにハトが戻ってこなかったことで、地上に水が引いたことを知ったのです。

このような方法で地上の状態を確かめるようにと直接神様から指示されたわけではありませんでしたので、信仰とは私たち自身でも考えること、試すことを否定していないことがわかります。しかしそれでもなおノアは、神様が箱舟から降りるように指示されるまで、勝手に舟から降りることはしませんでした。この徹底的な聞き従いこそ、ノアから学ぶことができる大きな教訓なのです。

【水・契約1】

創世記 8 章 20 節「ノアは主のために祭壇を築いた。そしてすべての清い家畜と清い鳥のうちから取り、焼き尽くす献げ物として祭壇の上にささげた」

ノアが舟から降りて最初にしたことは、祭壇を築き献げ物をささげたことです。この献げ物は神様への感謝を表していました。ノアの大洪水後の状態は、その前とは大きく異なっていました。世界がまるで違ってしまうとノアは想像できたでしょうか。洪水前は水の層が空を覆っていたため、地球はまるでビニールハウスの中にいるようにどこでも温暖で過ごしやすく、宇宙からの有害な光線を遮ったために、生き物も植物もよく成長し、長生きしたと考えられます。しかし、洪水後は北極や南極は氷の世界に閉ざされ、生き物や植物は弱くなり、寿命が大幅に短くなりました。日々の食べ物にも大きな変化がありました。

創世記 9 章 2～4 節「地のすべての獣と空のすべての鳥は、地を這うすべてのものと海のすべての魚と共に、あなたたちの前に恐れおののき、あなたたちの手にゆだねられる。動いている命あるものは、すべてあなたたちの食糧とするがよい。わたしはこれらすべてのものを、青草と同じようにあなたたちに与える。ただし、肉は命である血を含んだまま食べてはならない。」

エデンの園で人間の食べ物として与えられたのは植物でした。しかし、洪水後は植物が手に入らなくなってしまったために、動物や魚を食べても良いということになりました。その結果、動物は人間を恐れるようになりしました。洪水前は人間と動物との間に、恐れは存在していなかったのかもしれませんが。最近、様々な動物をペットとして飼う人が増えているようですが、どんな動物でも小さいときから育てると、まるで人間の子供のように甘えてきます。本当にかわいいものです。エデンの園では、このような動物との美しい関係がいつもあったのでしょうか。こうして、神様は動物の肉を食べ物として与えられたわけですが、すべての動物が食べ物として適しているわけではありませんでした。そのことが食物規定の「清い動物と汚れた動物」の区別の中に暗示されています。また、食べても良い清い動物や魚でも、血を含んだまま食べてはならないと明確に語られました。血は命であるからというのがその理由であり、霊的な意味が含まれています。私たちが生かすことができる命とは、キリストの血、キリスト肉、キリストの命だけであるということです。

【木・契約2】

創世記 8 章 21、22 節「主は宥めの香りをかいで、御心に言われた。「人に対して大地を呪うことは二度とすまい。人が心に思うことは、幼いときから悪いのだ。わたしは、この度したように生き物をことごとく打つことは、二度とすまい。地の続くかぎり、種蒔きも刈り入れも寒さも暑さも、夏も冬も昼も夜も、やむことはない。」神様は、「人が心に思うことは、幼いときから悪い」にもかかわらず、もう二度と「人に対して大地を呪うこと」をしないと約束してくださいました。地の続く限り、季節が変わることなく、めぐりゆきます。それゆえ、創造の時に語られた祝福の言葉、「産めよ、増えよ、地に満ちよ」と語るのです。そして、創世記 9 章 8 節から 17 節にかけて、「契約を立てる」という表現が繰り返されています。契約を立てるとの約束は、実は洪水の前に神様があらかじめノアに約束されたものでした。

創世記 6 章 18 節「わたしはあなたと契約を立てる。あなたは妻子や嫁たちと共に箱舟に入りなさい。」神様が人との間に立てられる契約とは、私たちの救いに直結しているものです。救いを確実に保証するためのものであり、分かりやすく表現すれば、救いの約束です。そして、その契約のしるしとして大空に「虹」をかけられたのでした。これまで地上に雨が降っていなかったのに、虹もありませんでした。空に 7 色に大きく輝く美しい虹は、本当に不思議です。科学的に虹が発生する仕組みが分かっても、それでも不思議です。神様の救いの約束を、今生きている私たちにも語りかけてくるのです。

ところで、この契約のしるしは、虹だけではありません。聖書はもう一つのしるしを教えています。それは安息日です。

出エジプト記 31 章 16、17 節「イスラエルの人々は安息日を守り、それを代々にわたって永遠の契約としなさい。これは、永遠にわたしとイスラエルの人々との間のしるしである」

エゼキエル書 20 章 12 節「また、わたしは、彼らにわたしの安息日を与えた。これは、わたしと彼らとの間のしるしとなり、わたしが彼らを聖別する主であることを、彼らが知るためであった。」

ある意味、虹は全人類に対するしるしとなるのに対して、安息日は、それを守る人たちとの間でのみ成立するものであり、この安息日を通して、主が私たちを聖別し、神の子、すなわち救われた者としてくださっていることを確認することができるのです。